

## 「梅園全集の編さん責任者

## 藤井専隨氏について」

白井 淳三郎

明治以来の三浦梅園研究史において、梅園全集の刊行は、一つのエポック・メイキングな事件であった。然も、一中学の校長が編纂のほとんどの仕事をやりとげたのである。

全集の最終ページにある梅園会会則の中に、藤井氏のごことは、県立杵築中学校校長文学士とあるだけで、これ以外のごことは梅園研究者にとっても、全く知られていなかった。

たまたま本年五月、安岐町教育委員会は、慶応大学教授の阿部隆一氏の調査にもとづく「三浦梅園自筆稿本並旧蔵書解題」なる書物を出版し、その付録に三浦梅園研究文献目録を追加した。これは、そもそも梅園学会会員の柳沢南氏（国立群馬工専助教授）が、会員の研究支援のため、自ら手書された三浦梅園研究文献目録を補充、拡大したものであったが、安岐町町長中尾弥三郎氏が自ら、この困難な仕事を買って出られ、苦心編集したものであった。このような仕事をつづける中で、ますます想い起されるのは、梅園研究のパイオニア的存在である藤井専隨氏の意義であった。事実、私が大分合同新聞に投書した如く、郷土史の長老に、ことごとく当ってみたが、藤井氏のことを知る人は全くいなかったのである。昭和五十四年の五月二十四日、私の投書に対し、いろいろな方々から情報が提供され、可成り具体的に、藤井氏の事跡は浮び上ってきた。その中の二、三を紹介してみた。

先ず最初に、県立杵築高校から、藤井専隨氏の履歷書を送ってきた。これによると、從七位文学士 藤井専隨、岐阜県平民、本籍地は岐阜県養老郡日吉村大字安久二番地となっている。生年月日は明治六年十二月五日。學歷は、

明治三十一年三月 県立尋常中学済々饗卒業

明治三十四年七月 第五高等学校予科一部卒業

明治三十七年七月 東京帝国大学文科大学哲学科卒業

#### 職歴

明治三十七年十月 茨城県立水戸中学校教諭心得

明治三十八年一月 同教諭

明治四十二年三月 大分県立杵築中学校長

明治四十二年四月 校長兼同教諭

杵築中学校校長として活躍されたのは、明治四十二年三月から、大正元年八月までの三年六ヶ月で、この間、あの二千ページに余る梅園全集上下二巻を編集発行したのである。

このあと、藤井氏は、旅順工科学堂（のちの旅順工大）の講師として、終身、歴史の講義をされ、その後、旅順高等女学校、旅順中学校の校長を歴任、昭和三年の定年まで勤め、本籍地に引揚げ、昭和二十六年に亡くなっている。

旅順での教え子の一人で、大分市植田下芹にお住いの安東秀夫氏（八十九才）の御手紙の一節を引用させていたゞく。

「先生は非常に話術がさわやかで、美辞麗句が口をついで出てくる方でした。

「士以って弘毅ならざるべからず。任重くして、道遠し。仁以って己が任となす。また重からずや。死して後止む。また遠からずや。」

このような調子で、力強く講義されたのが印象に残っています。」

次に、杵築中学の同窓会誌「風雪五十年」に載っている藤井専随氏自らの談話を引用してみよう。

第三代校長 藤井 専 隨

売家と書く三代目といわれますが、三代目というのは中々文句の出る難かしい時であります。それに初代広江校長、二代服部校長と、何れも定評のある名校長の後を継いだ私としては、杵築がはじめての校長ではあり、大いに頑張ったわけでありま  
す。

今日の若い人には、到底想像もできない時代で、杵築はまだ近代文化の動脈にはふれておりませんでした。赴任の際は、大阪から三百屯ぐらいの汽船で、守江のはるか沖合に至り、はしけで上陸、それから馬車にゆられて杵築の城下に着いたのです。明治四十二年から、大正元年の八月まで約四年間の在職でしたが、この間に時代も移り、汽車が杵築までついて、旅順の方へ転任の際は杵築駅でお別れしたのです。

最も私の記憶に残っているのは、やはり生徒の募集難でした。これには校長の手腕が評価される所から、いかにして我が校の宣伝をやるかということに、どこの中学も努力したものです。それには生徒を引連れて、国東半島を廻るのが、一番効果的だということになり、年中行事の一つとして、この行軍が行われましたが、今日のように行進歌とてもなく、黙々として歩くのみ。些か物足りないので、行進歌をつくり、作歌は私、作曲の方は、やはり杵築におられた松崎定太郎という先生にお願いしてつくりました。

これが今日の校歌となっておる「両子の高根、由布の嶺」です。あれを全校生徒が高唱しつつ、国東半島をぐるぐる廻っているうちに、志願者も年一年と増加してきて、藤井校長なかなかやるわいということになりました。その中でも一番、痛快だったのは、竹田津に泊り、翌日は両子の嶺を縫うて帰ることになったが、ちょうど大吹雪となり、その吹雪の中を銃をかっついで、堂々と、この歌をうたいながら帰校した三十年前の思出は、今なお私の脳裏に歴々と浮んでまいります。

(前記大会での藤井校長談)

尚、藤井氏作詞の校歌は次の通りである。

一、二子の高根由布の嶺　その影うつす豊の海

山水秀麗の気を受けて　宇宙の妙理を極めけむ

厚生利用努めけむ　偉人傑士の跡ふみて

吾等我友諸共に　向上の路たどらなむ

二、人文日々に進みゆく　我が帝国の青年に

望むところは偉大なり　花朝月夕束の間も

智徳を修め身を鍛い　錦江の水東に

流れて息まぬ心もて　理想の光仰がなむ

(終り)